

佛教の幼児教育

非草幼稚園 鈴木積善

はしがき

最近佛教保育といふ言葉が大分用ひらるゝやうであるが、これが單に佛教に關係ある者の施設經營乃至は従事するが故に、かう名づくるものゝすれば、それは非常に淺薄且つ誤れるものである。何故かといふにかくすることによりて徒らに黨中黨を建てることになり、且つ保育が宗教宣傳の手段となるの虞れがあるからである。勿論他の宗教の場合も同様である。保育なり教育なりは飽くまで兒童そのものゝ爲めであつて他の手段や方便の爲めであつてはならない。

若し佛教保育といふことを言ひ得らるゝとすれば、それは佛教が單なる宗教であるばかりでなく教育であるからである。換言すれば佛教は教育的の宗教であるからである。由來佛教は哲學的の宗教であることは一般に認められてゐるが、教育的宗教であることは餘り知られてゐない。

佛教は佛陀(Buddha)―覺の意―の教、又は佛陀たるの教であつて、覺醒生活を教ふるものである。即ち人間のめざめを尊しゝするものである。佛教が宗教であるにないに拘らず人間は覺醒生活即ちめざめでなければならぬ。而してめざめの教育は全人的であると同時に全生的である。未生前既に願子即ち申し子の信仰の説かるゝも見逃してはならぬことである。全生教育として、人生教育は双葉より培養すべきであるから、幼兒の保育が重要さるゝ所以である。

一、生きる教育

めざめるといふことは先づ人間の尊嚴にめざめることを第一とする。人間の尊きは單なる存在(ある)でもなく、生存(生きてゐる)でもなく、本當に生きる(生活)してゐるのである。

大自然は生々進化止まざるものである。これ如來(Parabrahma)の大用である。如來は如々來現の謂であつて、その如來の力は畢竟、らしく、現はるゝことである。花は紅、柳は綠、草木は草木らしく、禽獸は禽獸らしく、人間は人間らしく現はるゝのである。人間の人間らしきは單なる呼吸飲食する—禽獸はこの範圍を出でない—に止らず、更に成敗得失に支配さるゝことなき眞實の生活である。

眞實の生活は大自然の流れに順應して素直に生きることである。これ教育の根本である。換言すれば、大自然の進化の理法に順應し造化の實相に相應する處に教育の根本がある。これを觀實相といふ。畢竟自然は進化止むことなく天地一切をして生き生かしてゐる。岩石草木一切が生き進み行く姿に學び、自らも生き、一切も生き生かさしむる所に眞實の生活があり、生命の教育がある。

現在の教育は餘りに形式的注入的でこの生命が缺けてゐる。根本の信念が培はれてゐない。

二、靈肉一致の教育

古來靈肉の關係を見るに四つの様式に分けることが出来る。

- 一、靈(精神)と肉(肉體)とは全然無關係なりとみなすもの
- 二、靈は尊く肉は卑しきものとみなすもの。禁欲主義これである。
- 三、前者の反動にて肉主靈従とみなすもの。本能尊重、自然主義これである。
- 四、前者の弊害を認め、兩者を調和せる主張であつて、即ち靈肉一如とみなすものである。

現今行はれてゐる思想は靈肉一如であることは論を俟たない。肉體は罪惡の塊であり、心は精靈の貴き宮殿なりをなす考へは宗教にありて最も多く見らるゝ所であるが、佛教はこの二元的の考へを打破し、色、心不二、身心一如なることを高潮した。精神も天地の偉大なる力の發現であると同時に肉體も亦然りである。故に精神獨り尊くして肉體獨り卑しきものではない。肉體も悪く現はすまきは罪惡の塊となり、善く現はせば尊き働きをなす。即ち物と心とは區別さるべきものでなく所謂色心不二である。畢竟物とは外からこれを眺め心とは内からこれを眺めたに過ぎない。物をば總てを定量(二十一)とし、心として取扱ひ、心とはこれに反し不定量(二十一)としてこれを見たのである。

人間の肉體 一面肉體は惡魔でもある。肉慾の現れは罪惡である。然れども如何なる善事をも肉體を離れてはあり得ない。如何なる善き考へも肉體これに従はざるまきは單なる空想に終る。故に肉體は惡魔であると同時に如來身である。

人間が草木禽獸に勝る所以は精神のめざめと共に、この身體が各自の分擔せる仕事に服す、即ち働く所にある。然もその働くや、いや／＼勞働する(地獄)のでもなく、何等の目的もなく盲目的に働く(畜生)のでもなく、又慾多く不平斷えざる生活(餓鬼)でもない。——この三者を三惡道として却けてゐる——この三惡道に墮せず現在の仕事に全身全靈を打ち込んで喜び働く處に眞實の生活がある。

この喜び働ける陶冶性を養ふことが大切で、遊戯、體操、作業なきの重要なる所以も此處にある。

人間の精神 普通精神を分ちて知情意の三としてゐるが、佛教に於ては、この精神の病氣を貪瞋痴の三とし、これを三毒として極力排斥してゐる。痴は知識の病院に入れる形で所謂物識りである。痴者に徒らに知識を與ふれば益々重病となる。仍てこれを治する爲めには眞實の智慧即ちめざめみかくやうに導く。嗔は自我的動物性を中心として起るものであつて慢と表裏の關係にあり、癡癩、高慢となる。これに對しては輕安なる心持(即ちよろこび安んずやうにする。實は慾深で

あるからこれに慾を與へては駄目である。慾を轉向して、いさみすまひむるやうにすべきである。これを表示すれば、

知——痴——めざめみがく(智慧)
心——情——瞋(慢)——よろこびやすらふ(輕安)
意——貪——いさみすまひ(勇猛精進)

これを要するに、靜寂輕安な心持の中に研究改善怠りなき勇猛精進の力を養ふを根本としてゐる。これ即ちめざめ、道であつて、現在の器械的注入主義、記憶主義に對するよき警鐘でなければならぬ。

三、恩の教育

佛教にては因果假説、緣起實相を説く。普通因果を説くは假りの説明であつて、宇宙の實相を見る爲めには緣起によらなければならぬ。經に「緣起を見るものは法を見、法を見るものは佛を見る」といふてゐる。

天地一切のものは悉く緣起即ち諸條件の集合の現れなりを見る。即ち一物として單なる獨立せる存在はなく、悉く皆これ衆緣和合の力なりとなす、一木一草皆な天地自然の恩力の賜である。故にこの私なるものも亦天地祖宗の賜であつて元來我なる存在はない。即ち無我である。時間的には近くは父母より遠くは祖宗の流れ、空間的には、親戚、知己近隣より知るに知らざるに論なき社會の人々、これを統一せる國家、これを統治し給ふ一天萬乘の君主、更には見るに見えざるに論なき天地冥加の力、これらの恩力が縮りて我となつてゐるのである。我の今日あるは、天皇陛下を初め奉り、天地一切の賜、所謂世間様、御馳走様、お蔭様に外ならない。

「我物に思ひは輕し笠の雪」。これ普通の人情である。我なり我物に執する處に、強情、我慢、懈怠等が出る。無我に徹したときお蔭様、お合掌することが出来る。此處に、知恩報恩、無私奉公の姿が現はれる。私がするのでなくさせて頂くの

であるといふ信受奉行、感喜勇踊の生活となる。明るく輕安な氣持で喜び働く爲めには知恩報恩の教育が必要である。現在の教育は餘りに近視眼的であり功利主義である。

この考へが物に對しては、一木一草も雖も天地の現れであり賜であり來身なりとするときは、無限の價值を持つ、我なるものなし、況して我のものなるものもない。即ち無我所である。一切のものこれ天地の預り物に外ならない。預り物であるが故に、所謂勿體ないのである。勿體なきものなるが故に大切にしなければならぬ。親鸞上人が床上の紙屑に對して「勿體なやこれも天地のお寶」にして合掌されたのもこれである。

此處に物に價格ならざる價值を發見することが出来る。コップを毀したとする。若し普通の場合は十錢損したといふ。これコップの價格より見ないのである。けれども天地の限りなきお蔭様の結晶を見るべき價格は假令一錢のものでも價值は無量無限である。此處に「勿體ないことをした」といふ反省と眞の物を大切にすることを考へるのである。

現代はねだんのみを知つてそのねうちを見ることを忘れてゐる。おがむことが出来るものはねうちを見るべきが出来、ねうちを見出す處におがむ姿が現はれる。

現代の教育にはこの尊い合掌の教育、價值の教育、おがみ働く教育が缺けてゐる。

四、作業教育

觀實相といひ、身心一如といひ、信受奉行といふも、これを畢竟するに、いつでも(一切時)どこでも(一切處)何でも(一切事、一切物)、研究改善怠りなく、明るく正しく、全身全靈を打ち込んで喜び働くといふことに歸する。此處に作業教育の原理がある。

釋尊がすゝめられた子守歌に「さめよ、起てよ、動け、よろこべ」(覺起經)といふのがある。又釋尊が常に弟子達に出家

こ在家を問はずに常に訓へられたる言葉に「一日作さざれば一日食はず」といふのがある。この一日不作一日不食は人口に膾炙してゐる語であるが、これ等によりても釋尊の作業教育の思想を知ることが出来る。

佛教の幼児教育は詮すれば作業教育であるといふことも出来る程重要なものである。而して作業教育として最も大切なことは作業欲の培養と農業的共同作業である。

佛教は教へざる教育、めざめ育てる教育であるから、仕事をしたがる芽を損はずに培ひ伸ばすことが大切である。この作業欲の培養は次の三となる。

一、業務發見力 自分で仕事を見付けてするやうに導く

二、業務實行力 見付た仕事は必ず實行する。佛教は戲論を徹底に排する。

三、注意集注力 失敗なら失敗、成功なら成功で、その原因を明にし注意を集注せしめるやうにする。

次に緣起の實相を味はしむるには個人作業より共同作業をよします。特に、天地自然の恩恵によりて育て養ふ所の農業を第一とすべきである。

むすび

本稿をものこしてゐる際、幼児の教育、二月號を手にし倉橋先生の冠頭言「いきくしき」といふのを見て思はず快哉を叫んだ。いきくしきはあなたばかりではない。世の父たり母たり師たるものは皆これを必要とする。そのいきいきしさは「死のある所には存在しやう筈はない。いきいきしさは「生き生かす」所にのみ見出される。

いきくしきを欲するものは先づ自ら生きねばならない。めざめねばならない。創化の實相に相應する生命の教育、價値の教育生きる教育は其處から生れる。

(昭和九・二・二四日)